

新トーンハレが完成

2016年に改装が議決され、完成期日が2回延長されたトーンハレが、6月16日ついにお披露目記者会見を行った。旧トーンハレは1895年にブラームスが自作の『勝利の歌』を指揮して柿落しとされ、その美しい内装と、床の共鳴まで計算に入れた素晴らしい音響で愛されたが、1939年の万国博覧会に際し、華美な装飾を嫌う当時の風潮に合わせて灰色に上塗りされた。今回の改装では、上塗り部分を取り除き、ピンク色の大理石や金の輝きを取り戻された。またオルガンもリニューアルされ、より良い響きが得られるように左右の空間も取った。9月4日の一般公開を前に、コリン・マウホ市長は、日本人訪問客に対して「湖に面する階段は、若い層や外部へ開かれたトーンハレクラシック音楽の象徴です」と、歓迎の言葉を述べた。

「仮住まい」での最終章

改装期間の仮住まいだったトーンハレ・マールグで、チューリヒ・トーンハレ管弦楽団の音楽総監督バーヴォ・ヤルヴィが振る最後のコンサートシリーズを5月28日に聴いた。上限50人の聴衆をホール片側のみに設置の目状に配置し、休憩なしの短いプログラムだ。昨秋は渡航規制で来瑞を断念した、今季の「フォーカス・アーティスト」オリ・ムストネンのバルトーク「ピアノ協奏曲第一番」と、シユーベルト「交響曲第八番『サ・グレイト』」と2公演を続けて聴いた。ムストネンとの相乗効果でテンションがどんどん上がっていったバルトーク、それを昇華させたエネスコ「交響曲第一番」、そしてシユーベルトでは精緻な職人技を聴

かせた。

6月初旬のマイケル・ティルソン・トーマスのプログラムはキャンセルされたが、その後、収容可能人数が100人にまで引き上げられ17日にはヘルベルト・ブロムシュテット指揮、ギャリック・オールソンのピアノでベートーヴェン「ピアノ協奏曲第五番『皇帝』」を聴いた。93歳の指揮者を支えるように、地に足のついた柔らかい音色で奏でる73歳のオールソンは、空気感のある光のような音で別次元に誘っているようだ。管楽器がぶつきらばうに現実を引き戻す。第2楽章のフォルテ部分からは、挑発的なテンポで地上に降りて来たように色彩が戻ってくるという、異次元間を移動するような演奏だった。

24日にはサ・ナシヨナルという双子ロックバンドのギタリスト、ブライス・デスナーが、自作のピアノデュオ曲『El Chino』を、カティア&マリエル・ラベックと共にアレンジした2台のピアノのための協奏曲版（スイス初演）で聴いた。エネルギーが炸裂するラベック姉妹を支えたセミヨン・ピシユコフは、チャイコフスキー「交響曲第二番」でも現代曲のようなアプローチで、エッジの効いた演奏を聴かせた。

ルイジを送り出す チューリヒ歌劇場

6月19日、ファビオ・ルイジ音楽総監督退任コンサートではブルックナー「交響曲第七番」が演奏された。彼の発案で9年前に改名し、シンフォニーのレパートリーでの成長を見せたオーケストラは、大編成でも蜘蛛の糸のような弱音を自在に操り、テンポを変えていく。ピタリと合ったユニゾンが際立ち、クレッシェンドでも力みすぎ

ず、途中でふわつと抜いてもオーケストラは膨らんでいく。管楽器の音が突出してしまるのは、社会的距離を隔てた遠くから吹くせいだ。アンドレアス・ホモキ総裁のスピーチやプレゼント贈呈が邪魔なほどの余韻を残した。

翌日は半年ぶりに、観客入りで新演出下ニゼッティ『ランメルモールのルチア』が初日を迎えた。オーケストラと合唱はあいかわらず練習場からの遠隔共演だったが、ベルカント・オペラでこの形態は不可能だということが証明されてしまった。この時代のオーケストラレコーディングは歌に寄り添うように書かれている。それを、呼吸が感じられない遠隔で合わせるのは無理で、安全策を取れば、つまらない演奏になる。歌が大幅にずれた部分も、指揮のスペランツァ・スカッパッチは巧みに合わせたが、それも綻びを繕っているに過ぎず、芸術的高揚が生まれるはずもない。せめて合唱部分はエキサイティングに聞かせようとしているのか、生理的に無理のある超速テンポが痛々しい。唯一、芸術的だったのはエドガルドを歌ったピョートル・ベチャワだが、ベルカント歌唱とはいえない。ルチアはリセット・オロペーザがキャンセルしたあと、イリーナ・ルンダが代役をはたしたが、ロシア人らしい深い声色が興

味ぶかいものの、主役としての説得力はなかった。（狂乱の Aria）ではグラスハマーニカだけが生演奏で合わせたが、それでも息を呑むような瞬間は最後まで1度も訪れなかった。エンリーコ役のマツシモ・カヴァレッティは久しぶりに当歌劇場で聴いたが、がんばりすぎるところは若いころから成長していない。ライモンド役のオレグ・チブルコは声も器も、この役には到底およばない。そしてタチアナ・キユルバカの演出は、子供時代の遊びから発展した悲劇という設定だが、説明し過ぎる演出は効果を発揮せず、100人しかない観客の割には大声のブライニングが複数飛んだ（9月27日までHP上で視聴可）。



音楽総監督を退任するルイジ（左）に贈るプレゼントの説明をするホモキ総裁（右）